

## 外来生物防除から自然再生へ、伊豆沼・内沼の自己採点

(公財) 宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団

藤本泰文

伊豆沼・内沼での外来魚防除活動の結果、オオクチバスは数十分の1に減少し、在来魚の回復や希少魚のゼニタナゴの回復が始まるなど、大きな成果が実りつつある。ボランティアの方々や官公庁の長年にわたるご支援に心から感謝を申し上げたい。しかし、外来魚防除が成果を挙げる一方で、水質汚濁や二枚貝の減少、水生植物の多様性の劣化など、伊豆沼・内沼の自然にはさまざまな変化が生じている。その対策のため、平成21年(2009年)より「伊豆沼・内沼自然再生事業」として沼の生物多様性保全を目指した事業が取り組まれている。しかし、水質や二枚貝類の保全活動は、その因果関係の複雑さもあって、部分的には成果が出ているものの、まだ「十分な」成果には至っていない。

しかし、「十分な」という言葉を用いたように、どこまで成果が出れば、活動として成功なのか、数値目標を設定しながら進められている環境保全活動は、全国にどれだけあるだろうか？例えばノーバスネットの参画団体で、いくつの団体が数値目標を設定しているだろうか？恥ずかしながら、伊豆沼でも設定はしてこなかった。数値目標の設定は特に外来生物防除で重要で、根絶を目指せる状況であれば目標が明確だが、低密度管理の場合には、どこまで減らせれば良いのか示した事例はまだない。防除活動が長期化する中、活動メンバーのモチベーションとなるよう、分かりやすい目標設定も重要ではないかと、十数年の活動の中で感じている。

そこで今回の発表では、伊豆沼・内沼での保全活動を例に、簡便な数値目標の設定方法について検討した。数値目標の設定は、次の3つの手順で行った。①適切な指標(モニタリング項目)を設定する ②指標の最終目標と現状を鑑み、5段階程度の間目標を設定し、評価できるようにする ③数値目標は状況に応じて順応的に変更する。すなわち、指標項目の追加や中間目標のラインの変更を適宜実施して構わない。このことは、中間目標ラインの変化に伴い、過去の点数も変化することを意味する。また、途中から加わった指標について過去のモニタリングデータが無い場合は、聞き取り等により暫定値を設定できるものとした。このような考え方を基に、伊豆沼・内沼の外来魚防除活動については、オオクチバスの産卵床数、稚魚の捕獲数、定置網におけるオオクチバス・他の魚種・アメリカザリガニ・ゼニタナゴの単位努力量当たりの捕獲数の6点に着目して評価した。発表時には数値の設定方法などを具体的に示しながら、このような手法が他の防除団体の活動現場にも適用可能かどうかご意見を頂きたいと考えている。